

情報システムの社会的側面に関する研究 (2)

澤田芳郎 (愛知教育大学)

1. はじめに

コンピュータ技術を活用した情報システムの重疊的発達、現代社会の顕著な特徴のひとつである。社会制度や企業組織が、かかる情報システムを前提として構築・運営されるようになったことで、コンピュータ技術は単に業務合理化の方法ではなく、社会のありかたそのものに少なからず関与するにいたった。これに伴って、新しい社会問題やシステム開発課題が生まれている。

このような状況のもとで、情報システムとは何かをあらためて問う必要がある。本稿は、情報システムの形成を社会過程の観点からとらえるための一般的な枠組みの検討を目的としている。

2. 従来の情報システム論

従来、情報システム論は、システム開発の合理性をその根拠としてきた。すなわち、システムの目標は一定かつ既知であり、原因-結果関係は十分把握され、十分な情報にもとづいて最適なシステムが構築されるとする。この点から、技術条件が情報システムの特徴を決定するとみる「技術決定論」も導かれる。しかしながら、現実のシステム開発は「予

期せぬ結果」の頻発とそれへの対応に満ちあふれている。合理論の立場ではこれらを設計段階の仕様ミスや錯誤、あるいは開発管理上の問題と解釈するが、あらゆる予期せぬ結果を説明しつくすことはできない。というのは、システム開発そのものが解決すべき課題を誘発しうるからである。また、特定の組織における情報システムの機能追求が、社会全体に別の結果を惹起することがある。

このような問題は情報システムの開発を社会過程として定式化することで、理解の見通しが得られる。

3. 情報システムの社会的側面

要点の第一は情報システムの社会的文脈である。情報システムは特定の社会的背景のもとに構築されるが、背景のすべてが情報システムに吸収されるわけではない。したがって、情報システムの形成に伴う組織や社会の負荷は、社会的文脈において理解するしかない。さらに、情報システムは、それ自体が社会的文脈の一部をなす。不具合を生じたシステム開発は、それによるリソース消耗のために、さらに重大な不具合や事故をもたらしうる。

要点の第二は情報システム下における構造と行為の相互作用である。解釈的アプローチ

が明らかにしたように、人々の行為からこそ社会構造が立ち現れる一方、人々の行為は彼ら自身の制御を越えた力に拘束される。ここにギデنز（1976）が導入した「構造の二重性」概念、すなわち構造は人間の行為を「拘束する」のみでなく「可能にする」とのパーспекティブは、情報システムの社会過程を照射する。バーリー（1986）が描写したように、特定の情報システムのもとではじめて顕在化する構造と行為の相互作用は、類似状況下における柔軟・多様な情報システムの発生を説明するであろう。

要点の第三は、このような構造・行為相互作用は組織内にとどまるものではなく、社会全体の文脈において展開するということである。組織内の効率性を貫徹して構築された流通情報システムが交通事情の悪化や運輸業の経営問題を導いた例がある。また、同業種の企業が類似の巨大システムを競って構築したために、収益悪化等を招いた例は少なくない。

4. 学校教育と情報システム

情報システムの問題は学校教育にとっても無縁ではない。現実社会をシミュレートしながら、若い世代の成長を支援する場を提供する学校教育の場にもコンピュータ技術の浸透は不可避である。

発表当日は、CAI等の教育工学システムが学校教育にもたらす問題を、情報システムの社会過程の観点から分析的に検討することを予定している。